

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-8-

齊藤哲也（34）です。約80デジ

ベルの感音性難聴で、補聴器を装着しています。薬剤師の資格を保有していますが、現在は、メーカーでヘルスケア分野の研究開発に従事し、主に化学分析を担当しています（製品試験法開発や血液中成分の微量分析、製品の機能解析等）。こういった分析の仕事は、安全安心な製品を世に出したり、開発製品の特徴を掴む上で重要な業務と感じています。

また、ここ一年は、コロナ禍によるリモートワークの場が増えていきます。オンライン会議出席等へ

の不安がありました。が、チャットや字幕機能、カメラ顔出し等の様々なテクノロジーのおかげで、何とかこなせています。

ところで、私は大学に入るまで

難聴者が社会に貢献できる職種は多様にある

は医療現場で働く薬剤師や大学教員以外の職種の存在を知りませんでした。研究が大変な道であることは知っていたので、将来は薬剤師として現場で働くのだろうと漠然と思っていた。また、難聴

ゆえに、現場での円滑なやりとりへの不安もありました。その後、大学の講義で薬剤師には多様な職種があることを知りました。

そして、「聴覚障害をもつ医療従事者の会」を通して、様々な職種や場所で難聴者が活躍していることを知り、「聴覚障害を有しているも活躍できる医療系職種の選択肢はいくつもある」ことを学びました。同会との出会いが自分の将来を考えるきっかけとなり、最終的に自分の得意なことを活かせる道を選択することができました。

「聴覚障害だから道が限られているのでなく、聴覚障害だからこそ色々な形で社会に貢献できている」と言えるよう今後も積極的に発信していきたいと思えます。